

## 家形のお墓

第9回で入賞した新潟県長岡市の白井 千代エさん（当時75歳）のお墓は、建築業の亡夫のために五角形の家型の墓石。＜先祖代々建築業を営んできた主人の眠る墓を、建築設計事務所代表の長男と相談し新しく建立しました。生前主人は、家をつくるときは、必ずしっかりした基礎をつくり、その上にどちらかというシンプルで色彩的には優しい感じの家を創る人でしたので、そんな作風をお墓にデザインしてみました。主人の好んだ、ボリュームのある墓壇の上に桜色の御影石（岡山産 万成石）で切妻の家を表現した塔を建てました。その両脇に、誰でも隔たりなく家に迎え入れては談笑していた主人のために、外へ開いた形の門というか、外壁みたいなものを白い御影石（福島産 滝根石）でイメージし、全体としてシンプルで優しい感じの家をモチーフにしたお墓にして



第11回で入賞の宮城県仙台市泉区の遠藤 成之さん（当時46歳）は、自宅を縮小してそっくりのお墓を建立した。お墓はまだまだ先のことだと思っておりましたが、突然の妻の死により、お墓を建立することになりました。妻が生前、「お墓にはステンドグラスを入れてね・・・」とふっと漏らしたことがあります。あの時の約束を叶え、バラの花のステンドグラスを取り入れたお墓をつくりました。妻への感謝の気持ちと、いつまでも家族の思い出が残るよう、現在住んでいる家をイメージしたデザインに、ステンドグラスを取り入れた墓石にしました。



同じく第11回では東京都千代田区の松本さんは愛する自社ビルを模したお墓で入賞した。主人は作家であり、詩人であり、企業家でもありました。生前「自分が死んだらビルの下に葬って欲しい!」と話をしていました。ビルと言うのは故人が建てた会社のビルです。しかしながら、実際には遺志を叶えることはできませんでした。それでお墓のデザインは主人の希望を縮小した形で実現したいと悩んだ末、自社ビルそっくりにデザインした石碑を建立しました。



石碑の手前には作家、詩人であった故人を偲んで本を開いた形にデザインした御影石に、生前の言葉「真のロマンチストは、真のリアリスト」という文字を刻み、また生前に執筆した著書名などを記し、故人の生き様と業績を讃えています。

第19回では兵庫県姫路市の出口陽子さん（当時54歳）が、花立てとロウソク立てを門柱に見立てた「家のようなお墓」で入賞した。親はいつまでも元気でいてくれるものと思っていたけれど、そうはいかないのが、人の世の常らしい。進行性の癌のため72歳になる母が亡くなり、淋しさや儚さの中に迷い込んでいたら、翌年の5月に、どこまでも優しくった父までも、帰らぬ人となってしまいました。父と母が相次いで亡くなり、二人のことを思わない日はありません。もっと一緒に過ごせる時間があつたはずなのに…



そして7回忌を機に、そろそろ落ち着く場所という事で、お墓を検討することに。出来れば「お墓に入る」とか、「お墓参りをする」というような感じにならないもの、もっとほっこりと暖かな感じ、こういうところに居てほしいと思えるような、そんな場所にしたいと思いました。私たちの「家のようなお墓を」の希望に、石材店の方も始めは戸惑いながらも「これは楽しいですね」と、共に試行錯誤してくださいました。

第 21 回では大阪府泉大津市の稲葉 直子さんが家型のお墓に、ゴルフ場の写真をセラミックで焼き付け入賞した。主人を亡くして、お墓を建てることになりました。市営墓地の募集があり、自宅近くで墓地を確保することが出来ました。お墓は一般的な“和”のかたちではなく、オリジナルの形にしたいと考えていました。亡くなった主人は、家がとても好きな人だったので「家」をモチーフにしたお墓にする方向で、その他色々石屋さんに注文しました。お骨の壺ごと納めること。また、主人が生前ゴルフを楽しんでいたこともあって、よく通ったゴルフ場の写真をセラミックに焼き付けてもらいました。寂しくない様に、プランターを入れる花壇も作ってもらい、主人も喜んでくれていると思います。

